

特集 ④

変わる三津浜と変える人々

ミツハマル 事務局 大久保 守登 (松山市)

三津浜について

三津の歴史は確かなものでも室町時代まで遡る。河口内港の対岸に港山城が築かれたのを契機に食料品などの運搬のため渡し船が運行されるようになり、需要の増加によって魚市が大いに発展した。そのいずれもが500年以上の時を経て現在も続いている。魚市は現在松山市の公設水産市場として関係者のみが利用する施設となり、道後の湯と並び伊予節に歌われた朝市の賑わいを私たちが日常的に目にする事は残念ながらできなくなっ



てしまった。一方で渡し船は市道の一部として運行されており今日でも誰もが無料で乗る事ができる。土日は観光目的の利用も少なく

ないが、平日は主に地域住民の通勤通学の足として、特に朝夕はせわしなく行き来している。

三津は藩政時代に松山藩の藩港として御船手(船奉行)が置かれ、参勤交代の経路となるなど港町としての礎が

築かれた。高度成長期を経て自動車社会が成熟する以前は物流の要衝として、また商業地として松山市中心部よりも早く発展を遂げた地域である。多数の船宿、料亭、複数の映画館、芝居小屋、遊郭に競馬場と娯楽に関する多くの施設が三津にはあった。正岡子規の俳句にも多く詠まれ、幾度も宴席を設けた記録がある。夏目漱石の「坊っちゃん」、国木田独歩の「忘れえぬ人々」などに港町として三津が描かれ、文学上にも三津の繁栄を見る事ができる。

三津の町並みは松山市内の他の地区と比べると独特である。戦禍を免れたお



事務所内

かげで江戸時代以前の通りと建築の一部が残されている。かつて金融機関が並んだ大通りも自動車で通れば狭く、細い路地や曲がり辛い角が多くある。古民家や土蔵も残っているものの、それらは点々としていて内子や倉敷と比べるとさすがに少々寂しい感がある。しかし100年前の町家、昭和半ばから現代の住宅が隣接する光景は歴史の流れが感じられ、美観地区とは違った面白味もある。文化庁の登録文化財でありながら鯛メシ屋として営業している森家や、ボランティアが管理し、月に2回カフェとして公開される木村家など、かつての繁栄を偲ばせる古民家の活用も一部で行われている。

空き家と町家バンク

総務省の調査によれば愛媛県は全国でも二番目に空き家率の高い県である。統計上最も多いのは山梨県だが、富士五湖周辺の別荘なども空き家として含んでい



渡し船



かつてはアーケードがあり、電車の着く時間には人ごみで真っ直ぐ歩けないとまで言われた三津浜商店街も現在はその半分がシャッターを下している。しかしシャッターを下し閉店した店の奥には元店主が家族と暮らし、空き家ではなく住宅として利用されている。職住一

るために、実質本県が最も空き家率が高いのではないかと推測される。ミツハマルの調査によつて三津地区にも200軒前後の空き家がある事が分かっているが、そのうち売家や借家となっているのは10分の1ほどである。残りは様々な事情によつて適切な管理がされず、年とともに少しずつ傷みが進んでいる。中には屋根が壊れみるみる朽ち果てていく趣ある古民家もある。この空き家の惨状を改善し、逆に地域にとつての財産とするためにミツハマルは「三津浜町家バンク」事業を行っている。町家バンクは三津地区の空き家を調査し、所有者に依頼して物件情報を登録してもらっている。三津地区の不動産情報を出来る限り集約し、移住や移転希望者に最適な物件をマッチングするのが目的である。

体が利点であった看板建築が、今は商店街の物件不足の一因となつてしまっている。今後は、住まわれているオーナーの理解を得ながら、商店街の活性化のために、商店部分だけを賃貸してもらえような交渉にも力をいれていきたい。

地域と移住者、ミツハマルの今後について

ミツハマルは横浜市に本社のあるコラボ合同会社松山市からの委託を受け事業を行っている。築150年の古民家を事務所借りており、土間は展示スペースとして無料で貸出も行っている。これまで町家バンクの他にも、食べ歩きイベント「三津バル+（プラス）」の共催、町歩き看板の設置、町歩きマップの制作など三津の魅力を広く知ってもらうための事業を実施した。

複数の地域振興団体が活動する三津では最も新しい団体であるが、県外からの人材と他所でのノウハウが加わる事によつて、より客観的な立場から三津の魅力を発見し、また課題を見つける事もできているように感じる。今後県外からの移住者を呼び込み、また観光客を呼び込むためには何が必要なのかを他団体と共に考え活動していきたい。また、住み慣れた土地を離れ移住しようという人にとつて、最後の決め手になるのは人の縁ではないかと思う。これまで移住した人も、半数以上の人は多少の土地勘や知己があつて三津に來た人だつた。今後は、三津に深い繋がりを持たない移住希望者にも、できれば移住前に頼れる縁を作るお手伝いを、またミツハマル自体が頼られるような充実したサポートをしていきたい。移住後には地域団体への紹介や懇親会などを企画し、よそ者や新参者だと思わせないように地域が一体となつて受け入れていきたい。古民家や瀬戸内海の風景はもちろん町の魅力ではあるが、それを感じてもらうためには人の力が必要である。三津の町をより魅力的にしてくれる、新しい力を共に作っていくこうと思う。



町歩き看板



路地